

## 音楽表現と保育実践 ―実習を通して―

長 根 利紀代

## 1. はじめに

近年では、保育現場や保育者の役割の重要性が高まり、子どもたち一人ひとりへの更なる細やかな援助や配慮が求められている。しかし、こうした期待に答えられるためには、高度な実践力が必要となる。保育実践力は「専門的知識・技能に裏づけされた、具体的な保育状況の発達をもたらす保育者の行為として具現化される能力である」(注1)ことから保育者を目指す学生の自覚と学習意欲が問われることにもなる。

保育者養成においても、様々な社会ニーズに答えられるよう学生の能力の向上を目指し努力を続けている。学生自身は環境の変化を背景に生活経験の不十分さや精神的な弱さも目立つようになってきているものの、一年次・二年次と大学での学問的知識や実習での体験的な学習の課題をその学生なりに乗り越えてきたことが認められ、保育者としての成長が期待できると考える。そこで、学生が、そのプロセスを通してどのように保育実践力を身につけてきたかに注目し、本研究では、これまで学生が実習を進める上での大きな課題のひとつであった「音楽に関する」ものを中心に考察したい。「音楽」は子どもたちにとって生活や遊びの中心になっており、様々な音楽的表現が子どもたちの姿を通して確認される。幼稚園教育要領領域「表現」には子どもたちが自分なりに表現する中で、豊かな感性や表現力、創造性の育ちを重視し、「ねらい」の(3)では「生活の中のイメージの豊かさ」について述べている。また、「内容の取り扱い」として「(2) 幼児の自己表現は素朴な形でおこなわれていることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。」(注2)と明確な教師の役割にも言及している。このことから、子どもの発達を支える援助者でありモデルとなるべき表現者と

いう重要な人的環境として、学生が保育実践力を身に付けるための手がかりになる保育の視点について研究し、今後の学生指導の一助とする。

## 2. 研究内容と方法

1年生の「保育への関心」を把握するため、1年次の2週間の集中実習を後期に控えている時点で質問した。尚、1年生は、教育実習事前指導の一環として30分から半日の時間内で現場における課題実習「絵本の読み聞かせ」を経験している。2年生は「音楽的表現子どもの表現への関心」について保育実習前及び教育実習前後に質問し、それぞれの時期に学生がどのように保育を捉えているかについて調査した。そこから、学生が保育者として実践力を高める保育の視点や手がかりをどのように把握しているかについて考察する。

アンケート対象 : 13年度1・2年生

有効回収枚数 : 1年生173枚、2年生保育実習時142枚・教育実習時143枚

アンケート期間 : 平成13年7月

質問内容 :

1年生 『現在「保育」にかかわることで特に関心のあること』

2年生 (保育園実習・幼稚園実習前共、)  
「実習に行くにあたって音楽的な子どもの表現についてどのようなことに関心をもっていますか」  
(幼稚園実習後)「結果について」

実習期間 :

1年次後期 教育実習

8～9月各自2日間「見学・観察実習」、11月に集中2週間「観察・参加実習」

2年次前期 保育実習6月集中2週間「観察・参加・指導実習」

教育実習7月集中2週間「観察・参加・指導実習」

### 3. 結果と考察

#### (1) 1年生への質問『保育にかかわる「関心」について』

1年生は、教育実習事前指導と課題実習「絵本の読み聞かせ」の現場実践を経験した時点で、1年次教育実習を控えて「保育にかかわることで、特に関心のあること」について質問した。記述内容を整理するため大まかに17項目に分別して集計した。項目は「ピアノの弾き方について」「歌の指導について」「楽器と音遊びについて」「リズム遊びについて」「子どもの好む曲について」「子どもの発達と表現について」とした。その結果を上位からみると、1位「手遊びに関するもの」32名、2位「子どもの発達段階に関するもの」30名、3位「子どもの行動・心理状態・気持ちに関するもの」29名となっているが、項目からみて1年生の「関心」は、遊び・援助法・子どもの興味・環境・保育の内容・教材など広範囲に渡って示されている。の(表1・図1)。記述内容としては、「保育者も環境のひとつであるのでもっと保育者のこういうところが環境かなどを詳しく知りたい」、「今、自然が少なくなっているため、どこで自然とかわれるか」と環境に注目している。しかし、環境を実践的に捉え、環境構成について「どこのどんな物をどのように置いておくのか、子どもたちはどんな遊具を好むのか知りたい、レポートで環境構成を調べたとき、分からないことが多かったのでもっと詳しく知りたい」などの関心も現れている。時代的な背景に目を向けた学生は「昔と違って今の子どもたちは教育などが難しいと言われること、保育の今抱える問題点」と社会現状を概念的には捉えている。実践を意識して「1年を通して子どもの心身の発達理解、保育者の一日の活動と保育の内容」と身近な問題を取り上げ、「実際勉強したことを実践でどういうふうに進めたら生かせるのか知りたい。頭では分かっているもうひとつ具体化できない」など、保育を理論的で抽象的に捉え、知識によって実践を理解しようとしている。一方、「ケンカしている子どもへの対応」のように直接的な保育上の課題や「子どもたちの前でできるように手遊びや歌をたくさん知っておきたい」など、単純に教材の習得に向かうものもあるが、全体的には内容が想像的、主観

的である。また、「造形や音楽の活動で子どもたちのまっすぐな表現を見て学びたい」や「たくさんの子どものに触れ合って、子どもからいろいろなことを学び、自分も子どもにたくさんの希望を与えたい」など子どもへの関心の強さや保育現場に対する憧れが主流になっている傾向も強い。

表1 『現在「保育」にかかわることで特に関心のあること』

a	歌・手遊び
b	発達段階
c	子どもの行動・心理状態・気持ち
d	遊び・遊び方
e	保育者の子どもに対する援助・関わり方
f	ケンカ・トラブル対処法
g	子どもの興味・関心
h	環境・環境構成
i	保育の内容
j	教材
k	子どもへの言葉かけ
l	子どもとの触れ合い
m	病気・怪我への対応
n	障害児への接し方
o	日誌・指導案
p	虐待児への心のケア（親への対応）
q	その他 ・問題を抱えている子への対応 ・子どものつぶやき ・園の役割 ・児童福祉施設・老人ホーム ・保育が抱える問題点 ・砂場あそび ・実践への生かし方 ・モンテッソーリの考える保育 ・動と静 ・トイレトレーニング ・レゴ・ブロックの効果 ・鬼ごっこ ・乳児保育 ・ハプニングへの対応

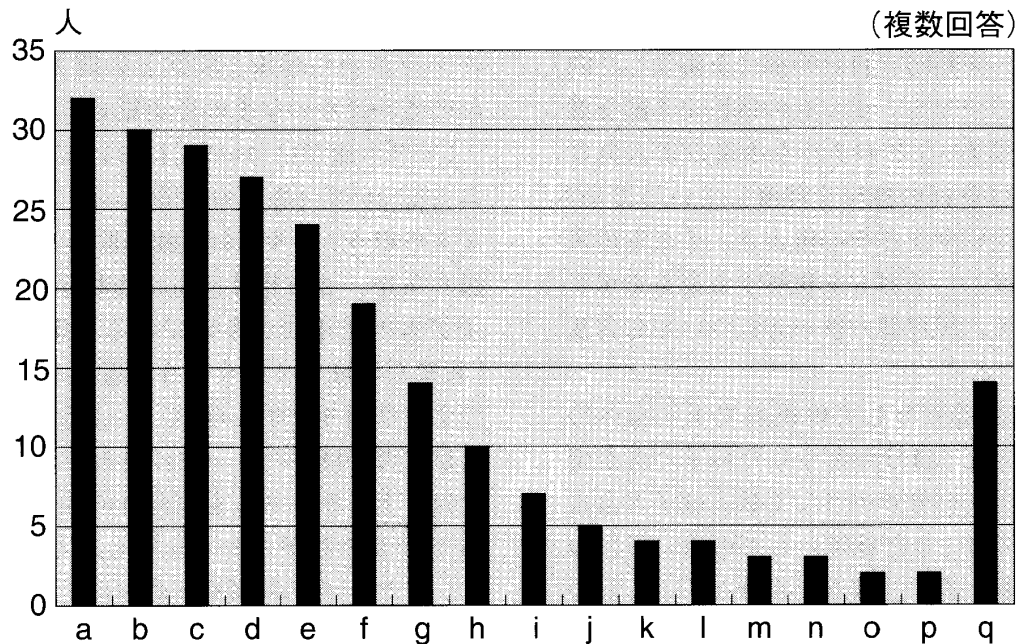


図1『現在「保育」にかかわることで特に関心のあること』  
(番号a～qは「表1」の項目に準じたもので、棒グラフは学生人数を示す)

## (2) 保育実習事前における2年生への質問「音楽的な子どもの表現についての関心」について

学生は1年次後期の教育実習を終えて、2年次になると幼稚園に先駆けて保育所の実習に取り組む。そこで、「音楽的な子どもの表現」に的を絞って関心のあるものについて質問した。ここでも、回答内容を項目別に整理し、「ピアノの弾き方について」「歌の指導について」「楽器と音遊びについて」「リズム遊びについて」「子どもの好む曲について」「子どもの発達と表現について」とした。ここで一番関心の高かったのは「歌の指導法について」だが、大差なく「子どもの発達と表現について」も関心が高い。

「歌の指導について」では歌と言うものの、主に手遊びに関するものが多い。ここではピアノとの関係に「ピアノ伴奏との関わり」として関心が向けられている。これは、「ピアノを弾いたら子どもはうたってくれるか、ピアノの音がなくてもうたっていけるのか」など初歩的な疑問があるが、中には「ピアノが苦手で弾きながら子どもを見ることができない場合はどうすればよいか、演奏を録音して自分でうたうのはどうか」など不安や戸惑いもみえる。この点は「ピアノの弾き方につい

て」でも「歌とピアノの合わせ方、ピアノは楽譜どおりきちんと弾かなければだめか、伴奏は間奏の部分までしっかり弾くべきなのか」や「間違えたらどうしたらよいか、途中で止まったらもう一回どうやってはじめればいいのか」と自分が失敗せず伴奏できるかという結果の是非に対する不安が大きいが、ピアノの苦手意識のある学生がもつ実習にむけての切実な関心であろう。しかし、「歌とピアノの合わせ方」に焦点が当てられている点は記憶したい。「歌指導」についてさらに考察すると、歌そのものへの関心として「歌の種類や選曲の目安、一日の使用曲数」、子どもの歌声や歌い方についての「響き、声量、テンポ」のほか、「保育場面による活用法」に関心が向けられているが、やはり、「子どもの年齢に合わせた手遊び、人気があるものや乳児の喜ぶもの」など「手遊び」には学生自身が「手遊びが好きなので担任がどんなものを使っているか」という関心の向け方もある。全体的に歌の紹介の仕方とその効果については「年齢によってうたえる歌や速さはどう違うか、どれくらいで歌を覚えるか、歌を教えるときはどのように教えたらいのか」と実習への不安をうかがわせている。「手遊び・歌を始めるタイミング、始め方、終わり方、次の活動への移り方」な

どはいかにして保育をスムーズに進めるかに関心が高いなど、主観的に自分の都合を優先した内容が多い。その中でも、子どもの個性や年齢を意識した対応の姿勢、「どのような手遊びが人気なのか、歌う時は歌詞の意味を理解しているのか」や子どものうたいやすさや心地よさ、子どもの表情や態度に注目し、子どもを理解する姿勢を示している。そして、保育者の歌い方についても言及している。

人的環境や表現者としての視点で子どもへの影響に関心を示し「自分がどうしたら子どもが楽しく歌えるのか、自分がやさしく歌えば子どももやさしく歌えるか」など教師としての歌い方について表情、声量、音の強弱など自分と子どもとの関係にも注目している。しかし、「一斉に声を合わせてうたうときどのくらいの速さがいいのか、たくさん一緒にうたいたいがどのようにうたえばいいのか」と指導側からの視点で保育を考えているのが分かる。

「楽器と音遊びについて」では「指導法と演奏法、年齢差とその対応」として「楽器に興味があるのか、何歳ぐらいから使えるのか、どんな曲で演奏するのか、楽器の受け持ちや年齢にあった楽器のレベルを決める方法」などに関心を示している。また、「子どもの好きな楽器とパートの決め方」や「年齢による使い方の理解度」を取り上げ、「どう教えたら集中し楽しんで演奏するのか、異なる楽器を使う合奏では、どのように全体をまとめるのか、子どもは自分以外の周りの楽器についてその音や曲をきいているのか」と実践にむけての関心の深まりが現れている。また、「音遊び」については子どもの発達を踏まえて「子どもに人気のある楽器、どのような楽器でどのような遊びを楽しむのか、どんな音が心地よいか、好きか」と目を向けている。「いろいろな音に対する反応」では「物をたたいたりして音や音を出すことを楽しんでいる子どもの気持ちや感じ方、雨などの自然の音にもっと興味をもてるようにするにはどうしたらよいか」と様々な視点でみようとしている。そして、「どのような楽器を作ったっているのか」と「簡単な手作り楽器」への関心もあり、「合奏している中で新しい音を発見した子がいた場合、流れを止めるべきかそのまま進めるべき

か」と子ども側に立って思案しているが、経験の不十分さから理論と実践との関係が頭にあるものの生かせない学生の姿が見える。

「リズム遊びについて」における「ダンスやリズム」について「乳児の心地よいリズム、年齢別リズムの取り方」や「お遊戯の教え方、振付けたら踊れるか、2歳児は音楽に合わせて踊れるのか」子どもの発達面を考えている。保育の視点では「音楽だけ流して思うように踊るよう促したらどのような踊りをするのか、まったく知らない曲でも保育者が踊ったら一緒に踊るか、先生がどう動けば子どもがリズムを取れるのか」などに関心があり、少数だがリトミックも取り上げられている。また、「曲の種類や選曲の目安、音への反応と歌遊びとの関わり」に「踊りだしたくなる音楽と踊り方、歌いながら遊べる遊びの種類、音楽に頼り過ぎないで常にリズムのある雰囲気作り」と保育者の援助に言及している。

「子どもの好む曲について」は自分たちの子ども時代に遊んだわらべうたなどや、子どもの好む歌の「獲得法、曲名、年齢による興味や取り入れ方の違い」に関心を寄せ、「覚えた曲がどのように子どもの間に広がっていくか、どんなときや遊びの場面で取り入れているのか」と記述している。また、ここでは、TVの影響や歌謡曲など流行との関わりに注目している。

「子どもの発達と表現について」は、「子どもの年齢と興味、反応、能力」について「子どものうたいやすい音、歌への理解度」として「音楽で子どもたちの動きがどう変わるか（音の高低、速度）、歌に振り付けをするのか、子どもたちは、そのときの気持ちで踊りや歌のリズム感が変化するものか」、さらに「年齢によってどのような題材の歌が好まれているのか、3歳未満児は動物の歌をうたいながら動くことができるのか」と細かな点に注目している。また、「〇〇ちゃんいれて」などの生活や遊びの言葉のリズムや音程にも関心をもっている。保育する視点からは「子どもがうたいたくなる、体で表現したくなるような楽しい雰囲気作り」など、環境構成や援助も考慮し、「雨の音など自然の音をもっと興味をもてるようにするにはどうしたらいいのか、踊りのイメージ作りと子どものイメージとそれに伴う動き」に関心

を寄せ、子どもの環境やイメージと表現との関わりも意識している。また、「子どもは音に合わせて動くのが好きだが、リズムに合っていないか、スキップをどのように取り入れ指導して

いるか」と遊びとの関係、さらには「音楽嫌いになった子の時期と理由」と子どもの特性にも目を向けている。(表2)

表2 保育園実習前質問「音楽的な表現への関心」

	項 目	内 容
弾きピアノの方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌の伴奏について、弾き歌い(歌との合わせ方、子どもの反応)</li> <li>・楽譜と演奏</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが歌いやすいピアノの弾き方</li> <li>・ピアノ伴奏や演奏に対する子どもの反応</li> <li>・弾き間違えたときの対処法</li> </ul>
歌の指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法(環境構成、タイミング、テンポ、必要時間、歌詞)</li> <li>・歌の効果(反応)</li> <li>・ピアノ伴奏との関わり</li> <li>・一日の使用曲数</li> <li>・歌の種類と数、選曲の目安</li> <li>・保育場面別指導法</li> <li>・保育者と子どもとの関わり</li> <li>・他の活動との関わり</li> <li>・子どもへの対応(個性、特性)</li> <li>・子どものうたい方の特徴</li> <li>・子ども理解</li> <li>・教材の活用法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パネルシアターやペープサートの応用</li> <li>・音楽嫌いな子どもへの対応</li> <li>・挨拶の歌の使われ方</li> <li>・ピアノ中心と保育者の声中心との違い</li> <li>・年齢別に適切な歌の種類とうたい方の特徴</li> <li>・歌を覚えるまでどのくらいかかるか</li> <li>・歌いながら片付けたらスムーズか</li> <li>・保育者の歌い方と子どもの反応</li> <li>・歌から別の活動にどうつなげていくか</li> <li>・歌を歌う状況と楽しい雰囲気作り</li> <li>・季節の歌、生活の歌の種類と選曲</li> <li>・うたいやすさ、速さ、心地よさ</li> <li>・うたう時の子どもの気持ちや表情</li> <li>・教材を使うタイミングや導入、応用法</li> </ul>
楽器と音遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法と演奏法</li> <li>・楽器の種類と取り扱い方</li> <li>・子どもへの対応</li> <li>・年齢差と指導法</li> <li>・保育場面との関わり</li> <li>・手作り楽器</li> <li>・音遊び</li> <li>・曲の種類</li> <li>・子ども理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの好きな楽器とパートの決め方</li> <li>・楽器の使い方の理解度</li> <li>・年齢別にどこまで使うことができるか</li> <li>・子どもの性格がどのように出るのか</li> <li>・日常の保育の中での活用法</li> <li>・簡単に作れる楽器と素材</li> <li>・音に対する興味と反応、好きな音</li> <li>・器楽合奏のまとめ方</li> <li>・音と気持ちの関係が表現に現れるか</li> <li>・自然な音への興味はどのようなものか</li> <li>・自然な音への興味と育ち</li> </ul>
リズム遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法</li> <li>・種類と選曲</li> <li>・子どもの対応</li> <li>・選曲の目安</li> <li>・リトミック</li> <li>・ダンス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢別リズムの取り方と遊び</li> <li>・スキップの取り入れ方</li> <li>・年齢差、男女差の特徴把握と対応</li> <li>・踊りだしたくなる音楽と踊りかた</li> <li>・大人と子どもの表現の違い</li> <li>・歌いながら遊べる遊びの種類</li> <li>・曲と動きの関係</li> <li>・音の高低や速度に対する反応</li> </ul>

	項 目	内 容
子どもの好む曲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好まれる曲名</li> <li>・年齢別特徴</li> <li>・うたわれるときと場合</li> <li>・子どもが知っている曲数</li> <li>・伝承的な遊び（わらべうたなど）の獲得法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの間で流行っている歌や手遊び</li> <li>・年齢別に子どもが好むもの</li> <li>・覚えた曲数と子ども間での広がり方</li> <li>・歌謡曲、童謡、TVやアニメの主題歌などの覚え方と園でうたう歌との子どもに与える影響</li> </ul>
子どもの発達と表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの年齢差</li> <li>・能力、判断力（音域、音感、リズム、声量、歌詞）</li> <li>・子どもの歌いやすい音域</li> <li>・子どもの興味や反応、理解度</li> <li>・歌と遊びの関係</li> <li>・歌や遊びの獲得法</li> <li>・環境構成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園と園以外で覚えたものの反応や影響</li> <li>・歌詞やメロデー、音程、リズムの理解度</li> <li>・遊びの中で自然に口ずさむ歌と覚え方</li> <li>・何を基準に音楽を楽しんでいるか</li> <li>・声の大小、元気な声と怒鳴り声との区別</li> <li>・年齢的にどのくらいまで何ができるか</li> <li>・替え歌は何歳ぐらいからできるようになるか <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽嫌いになった子の時期と理由</li> </ul> </li> <li>・手遊びの真似は意識的か無意識か</li> <li>・「○○ちゃん、いれて」などはどの子もリズムや音程が同じなのはなぜか</li> <li>・手遊びの歌と動作ではどちらが記憶に残るか</li> <li>・なぜ0歳からでも音を好むか</li> <li>・子どもが歌いたくなるとき</li> <li>・子どもが体で表現したくなるとき</li> <li>・雰囲気作り</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝と帰りの挨拶はリズム的か</li> <li>・絵本の読み聞かせでの挿入歌の歌い方</li> </ul>	

### （３）２年生教育実習事前における質問から

保育実習に続き、教育実習を控えている時点で前回と同様に「音楽的な子どもの表現についての関心」について質問した。ここでの内容も前回と同様、項目別に整理し「ピアノの弾き方について」「歌の指導について」「楽器と音遊びについて」「リズム遊びについて」「子どもの好む曲について」「子どもの発達と表現について」「その他」とした。この時点でも「関心」は「歌の指導について」が高いが、さらに「子どもの発達と表現について」は、この項目に関する記述の増加と、その視点がより子どもの側に立ったものが多くなっているのが印象的である。

最初に「ピアノの弾き方について」をみると、子どものうたいやすさや反応を考える記述が増加した。ピアノの演奏や伴奏は「伴奏の効果、演奏における時と場合への対応」としてその必要性が保育場面を考えて選択する意識も見受けられる。

「歌の指導について」では手遊びよりも「どのよ

うにしたら新しい歌を自然に歌えるようになるのか」と新曲を主にした指導に「子どもの無理のない」方法に関心が高く、「うたえることうたえない子」への対応など、子どもの発達や特性、主体性から「子どもが喜ぶ紹介法と保育者の役割、保育形態、子どもが楽しめる音楽的環境」にも配慮でき、「うたうだけと教材を通すときの違い」と、よりよい保育方法を模索している。記述の中に「手話」を取り上げたものがあるが、現場で出会って興味をもち「先生がテープをかけてうたいながら手話をする」と子どもも一緒に手話をしながらうたっていたので関心を持った」と述べている。しかし、手話を取り入れるとき手遊びのような遊びに位置付けてはならない。本来の意味を子どもが理解できるよう配慮することが大切である。ここでは「みんなであうたう」ことにも注目し、集団での活動が難しい幼児期にともだちとの関わりに対して、「みんなと合わせてうたうことがうれしかったり、楽しい、面白いと感じるようにする

ための指導の仕方」と子どもの心情にも言及している。さらに、音楽表現を通しての保育のねらいや保育者としての表現について「歌を通して伝えたいことがどれくらい伝わるか、子どもたちがひきつけられる歌はどういうものか、一緒にうたいたくなるような保育者のうたい方、音色、声の大きさはどんなものなのかなど、自分が子どもたちの前に立ったときの表現方法に関心がある」と自分を子どもの側から見つめる視点も現れている。また、子どもの姿から保育を見つめ直し『1年生の時の実習で先生が「もっと大きくうたおうか」と言ったら怒鳴るようにうたってしまう子どもたちがいた。どうしたら楽にうたえるようにしてあげられるのか』と保育者としての「気づき」の目が注がれている。表現は大人の都合や満足のための価値観で左右することなく、子どもの発達からの適切な援助がおこなわれねばならない。

次に、「楽器と音遊びについて」をみると、ここでは楽器の種類や扱い方に加えて、子どもの発達や年齢、子どもの好み、そして鼓笛を含む指導法と子どもの反応などが取り上げられている。さらに、子ども理解や演奏以前の「音」との関わりにも関心が深く、特に、「楽器の音だけでなく、雨や雪など自然の中の音、日常使っているものの音についての興味がどのくらいあるか」や「どんなイメージをもち、その音を体や言葉で表現するとどのように表現するか、どのようなものをどのように工夫して音を出そうとするか」と記述し、「身近な音との自然な関わりや発見、遊びに取り入れていく過程」や「音を聞いて表現するときと遊びの中で音を見つけるときはどのように違うのか」と音遊びを子どもの生活や遊びの姿から見出して、より子どもに即した保育を考えようとする姿勢が強くなっている。

「リズム遊びについて」でも、子ども理解と発達援助や環境構成への視点が強化され、個人差においても、「すでに内容を知っている子と知らない子がいた場合への対応」に留意している。この中で環境構成では、「遊びにおける年齢別と混合による子ども同士の人的環境からの差や特徴の比較」、「子どもがスキップのリズム習得のできる環境構成への関心」を示すなど保育理解の深まりを見受ける。また、「子どものリズムに合わせて保

育すること」、「子どものイメージを豊かにする音楽的表現」、そして、「指導案を立てて進めようとするとしても考えたとおりに動いてほしい」と思ってしまう。それではいけないことは分かっているが、子ども主体でやりたいと思ってもなかなか進んでいかないと思うので、子どもの意見を取り入れながらできるよい方法」と述べ、現場体験を重ねる中で学んだ理論と実践との間で保育を模索する姿勢がある。

「子どもの好む曲について」においては、学生が観察した「子どもたちが楽しんでうたう姿」から保育者によって子どもの好きな歌をうたうようにしていたことを知り、その方法に関心を示した単純な考えもある一面、「子どもの間での流行や曲の特徴、人気曲の伝わる経路、遊びに取り入れ易い曲、うたわれている場面と種類」さらに「日常的に自分の家や遊びの中でうたったり踊ったりする曲」として子どもが自分のものにして楽しむものなど、「遊び」に焦点を当て、自然な姿から子どもを理解し発達に即した教材を求める意向が認められる。

「子どもの発達と表現について」については、これまでのどの項目にも取り上げられてきたが、ここでは特に全体的な子どもの姿を中心にしたものをまとめた。「子どもの興味や反応」での「曲にあわせて体を動かすのはなぜか」には発達理解に学習の不十分さが目立つのが気がかりである。ここでは子どもの音楽的表現に関する発声や音感など、また、「身近なものも音楽にしてしまう子どもの様子」の「子どもだけの遊びの中にどれくらい歌が関わっているか」にもあるように、環境に主体的に関わり音楽を遊びに取り入れ自分のものにしていく感性や創造性、判断力など子どもの内面に育まれる様々な能力に気づき「発想したことや想像したことを自分でどこまで表現できるか」から、「音楽的な表現活動をするに当たり、子どもが充実感や満足感を得たとき、どのような表現の仕方をするのか、子どもの内面での活動から表現として外面に現れるまで」と目に見えない子どもの内面の育ちと表現との関係に目を向けている。そうした視点は「歌や遊びの関係」の「活動の中で鼻歌をうたっているときの子どもの心境はどうなっているか」など「鼻歌、替え歌、で

たため歌」を大切に受け止めたり、「歌をうたうだけでなくそれを発展させ振り付けや作品作りなどを加えると子どもの意欲や関心が高まるのか」のように活動の発展を視野に入れ子どもの育ちを援助しようとする積極的な姿勢や意欲も現れている。また、ここでも保育者としての自覚を持ち、「保育者に対してどれくらいの期待を持っているか」と保育者に対する子どもからの関心にも注目し期待にこたえようとする意識も認められる。

「その他」では、学生はこれまでの実習経験から施設による内容の比較に関心を向けている。ひと

つには、幼稚園と保育所の保育者の指導方法であり、同年齢の子どもの発達や活動の様子と保育者の関わり方。もう一方では1年次と同じ幼稚園で実習することによる同一児の進級した成長の姿を捉え「個人的な子どもの発達」に注目している。また、ここでは音楽的表現と子どもの発達について個々の子どもの感受性、心、イメージなど内面の育ちを援助するという保育の視点で子どもを捉え「その子どものイメージをより豊かにするにはどのような音楽的表現が必要となってくるか」という点に関心をもっている」と記述している。(表3)

表3 幼稚園実習前質問「音楽的な表現への関心」

	項 目	内 容
弾き方のピアノ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌の伴奏について（必要性、効果、テンポ、）</li> <li>・実践力と子どもの反応</li> <li>・演奏の時と場合への対応</li> </ul>	<p>子どもが歌いやすいピアノの弾き方 ピアノ伴奏や演奏に対する子どもの反応</p>
歌の指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法（期間や時間、環境構成） （タイミング、覚えやすさ、リズム）</li> <li>・うたい方（音色、音程、音域、声量）</li> <li>・歌の種類と選曲の目安</li> <li>・人数による違い</li> <li>・保育形態による違い</li> <li>・年齢差、男女差</li> <li>・保育場面別指導法</li> <li>・ねらいと教材及び環境構成</li> <li>・歌遊び</li> <li>・子どもの発達と子ども理解</li> <li>・指導案</li> <li>・歌と手話</li> </ul>	<p>子どもが喜ぶ紹介法と保育者の役割 大きな声でも怒鳴らず楽な歌うたい方 うたう表情や様子の把握 子どもが楽しめる音楽的環境 みんなでの時と一人の時の歌や動きの違い 歌だけのときと教材を通すときの違い 歌のジャンル別割合と適切な選曲 音楽の目的や歌を通して伝えるもの 音楽的な子どもの表現とねらい及び教材 子どもの心に残るうたい方や印象付け 子どものリズムにあわせた保育 日常の遊びでの音楽の取り入れ方 うたえること歌えないこの差 一日の中での音楽的活動内容</p>
楽器と音遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法と演奏法</li> <li>・楽器の種類と取り扱い方</li> <li>・子どもへの対応</li> <li>・年齢差と指導法</li> <li>・音遊び</li> <li>・鼓笛の指導法</li> <li>・子ども理解</li> </ul>	<p>楽器の年齢別理解度 使っている楽器と人気のある楽器 3歳児の楽器の接し方、音との関わり方 打楽器に対する子どもの反応と演奏 音に対する反応、好きな音、イメージ 楽器を使った子どもの表現表 自然な音とのかかわりや発見 身近な音を自然に遊びに取り入れていく過程</p>



	項 目	内 容
リズム遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法</li> <li>・種類と選曲</li> <li>・子ども理解と発達援助</li> <li>・リトミック</li> <li>・ダンス</li> <li>・音楽的表現方法</li> <li>・環境構成</li> <li>・個人差に対する対応</li> </ul>	年齢別と混合での遊びの差や特徴(友達等の人的環境) スキップのリズム習得への環境構成 子どもの主体的音楽活動と保育者の働き 子どものイメージを豊かにする音楽的表現 動物の表現方法 音楽に合わせた歌や体の動き 年齢別リズムの取り方 遊びに取り入れ易い曲 遊びの中での歌の取り入れ方(わらべ歌など) 音楽を聞くと体を動かすのはなぜか 遊びの内容を知っている子と知らない子への対応
子どもの好む曲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好まれる曲名と特徴</li> <li>・年齢別特徴</li> <li>・遊びとの関わり</li> <li>・曲の特徴</li> <li>・人気のある歌のリズムやテンポ</li> </ul>	子どもの間で流行っている歌や手遊び 年齢別に子どもが好むもの 人気曲の伝わる経路 遊びにおける歌の覚え方 遊びに取り入れ易い曲 うたわれている場面と種類 日常的に自宅でうたったり踊ったりする曲 子どもが自分からうたいだす歌
子どもの発達と表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢差と能力 (音域、音感、リズム感、声量、発声、音色)</li> <li>・子どもの興味や反応</li> <li>・能力、判断力、主体性</li> <li>・歌と遊びの関係</li> <li>・うたい方や音楽的な表現方法</li> <li>・環境との関わり</li> <li>・保育者への子どもの関心</li> </ul>	手遊びを使うときの状況 新しい歌を覚える期間 はじめての歌に対する子どもの反応 音楽を弾くと体を動かすのはなぜか 子どもの好きな歌、手遊び 子どもの好むテンポ、音、楽器 自由遊びの中でうたわれているもの 興味をもつ音 男女の声や年齢別による音楽への興味の違い 決められた歌とでたらめ歌のときの表情差 うたう子どもの格好 身近なものも音楽にになってしまう子どもの様子 子どもは音楽に合わせどのように表現するか 自分がおこなう保育に対する子どもへの影響 替え歌やでたらめ歌、鼻歌の成り立ち うたい方の特徴 わらべうた 保育者にどれくらい関心を持っているか
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園と幼稚園との比較</li> <li>・音楽的活動内容</li> <li>・子どものリズムと保育</li> <li>・個人的・年齢的子どもの発達</li> </ul>	子どものテンポに合わせて保育する 歌への関心、うたいかた、保育者の指導法などの違い 子どもの心やイメージの豊かさを重視した音楽的表現 の必要性 1・2年次同園による実習での進級児の成長 幼・保における子どもの年齢による比較

#### 4. まとめ

子どもの音楽的表現は、目に見える形がたとえ幼稚であっても、子どものうちに蓄積された内容ははるかに豊かであり、保育者の適切な援助によって様々な方法で表現される。子どもたちは細やかな配慮をもって整えられた教育環境を通して、豊かな感性を育て、意欲的に活動することでさらなる表現の内容を蓄積していく。こうした子どもの表現への態度は、何よりもまず安心して伸び伸び生活や遊びを楽しめる人的・物的環境が大切となり、特に、保育者との信頼関係が不可欠である。子どもは園生活において自分があるのままだに受け止められ、形は整わないまでも感じたままに表現を楽しむ中でともだちと喜びを共有し、やがてみんなで楽しむ活動へと発展していく。歌をうたわなくてははいられない、うたいたすと自然に体が動き出す子どもの心と体の発達の特徴は学生があらかじめ理論を通して認識し、子どもの姿についての具体的なイメージを基にして活動の予測ができるように準備して実習に望むことが必要である。実習は、大学の理論を基に保育現場での保育の実践を体験的に学習し、学生自らの保育の課題を科学的な視点で見出して学習の方法を探りながら保育者としての能力を高め保育実践力を身につけていく。

そこで、学生が2年間の中で保育現場と大学を行き来しながら実習の度に直面する諸問題を把握し、その時期に必要な指導を効果的に進められるよう、学生が子どもたちに学ぶように教員も学生の成長の姿を確認することが大切である。1年次では、入学して半期を経る中で保育の内容を授業を通して理論的・知識的に認識し始め、実技も授業内で取り上げた手軽な手遊びや実体験のある絵本の読み聞かせなどを数多く覚えたり、自分が満足や安心が得られる材料にすることに関心が高い。ここでは、未体験からくる実習への不安や期待の強さも伺えるが、子どもの発達や障害児、虐待にも関心をもっていた。学生は様々な授業を受ける中で視野が広がり、現代が抱える問題点を含め1年生なりの真剣に保育と向き合う姿が認められ、学習への意欲も見受けられる。

2年次になると、1年次の教育実習の体験における保育実践の具体的な方法を指導教官である

担任の姿から模倣的に学習したものを通して表面的な実践力を高めようとする傾向が強い。むろん、意識の中では、大学での学習を実現したいと努力し、子どもにみるありのままの姿や発達、保育の方法を模索する姿も認めることはできる。しかし、実際に子どもの前に立ってある程度の結果を期待しても、力量不足に伴う実践上の様々な問題に直面すると、「ピアノの弾き方について」にみたように歌の伴奏に対して卒なく弾きこなすことができるかに集中した「関心」も、自信のなさや実習の不安から理想と現実の狭間で表面的に無難な保育場面をつくり上げようとするようになる。この傾向は学生的心情から無理もないと理解できるが、子どもへの対応はそうした視点で学習することにつながる。理論や思い描いていた保育の理想を求めながらも、実習という現実には学生自身が安心できる結果を求めて、実践力を高めようとする意識は根強く残ることも否定できない。こうしてみると、学生がはじめての実習で出会う先輩保育者の姿は重大で、学生の実践力のあり方に非常に大きな影響を残し、その後の実習や就職までも左右することに留意しなければならない。

保育実習を終え、教育実習を目前にするころになると、実践経験も増え、保育にもゆとりを持って取り組もうとしていることがその記述にみられる。保育実習後は、大学での事後指導や授業を通して、自分の保育の見直しや、本来のあるべき子どもの発達援助の視点に立ち返り、「子どもの発達と表現について」の項目に関する記述も増加している。また、「歌指導について」でも、うたえない子ども、保育者の役割、保育形態や子どもが楽しめる音楽的環境への配慮など保育の大切な手がかりを見出し、関心を示すようになっている。さらに、この時点での学生の記述には、子どもが自発的に遊びを楽しむ姿や素朴な人やものとの関わりを通して展開する音楽的表現に気づき、大切に受け止めようとする視点が強化されている。子どもや保育者の相互関係を客観的にみつめ保育の質的向上に向けて、広い視野で保育全体として学習しようとしている姿勢も明確になり、観察のポイントや読み取りも深くなっている。こうした点から学生は、保育者としての意識が高まり、自らの実践力を自覚し前向きな学習の方向や

意欲を示している。こうした点は、保育実習の記述にみられた「子どもが自然の音に気づき遊びに取り入れる姿への視点」は、教育実習では「子どもが出会った様々な音を遊びに取り込んで楽しむ姿を大切に受け止める視点」に「関心」の深まりをみることができる。また、保育実習では質問についてたった一人「わからない」と答えていた学生は、実習後の記録に「実習園で甘えが充分受け入れられていない子どもが、私につばを吐いたり叩いたり蹴ったりしてきた。そこで、子どもの心を受け止めながら手遊びやペープサートを使って歌遊びをしたり、外でゲームするなど、みんなと一緒に遊ぶ楽しさを味わえるよう配慮した」と述べている。そこで、この学生の教育実習前の質問をみると「普段会話のできない子どもでも歌遊びやリズム遊びに楽しく参加できるようにするにはどうしたらよいか。動物になってみたら自分の気持ちが言えるようにならないか」と記述している。そして、教育実習に向けて「ペープサートを使った歌遊び」を計画した。すると「みんなと一緒に行動できない子ども」に出会ったことから、実践に取り組んだが「歌遊びには参加してくれなかったし何気なく関わろうとしても嫌がってしまい、どうしたらよいか分からなかった」と力量の不足を訴えている。ここでは、こうした「気がかりな子ども」に適切な援助は見出せないで終わっている。しかし、一方では、この実践を通して「準備していた歌遊びを楽しく実践することができた。子どもからもっともっとと言われてネタ切れになってしまったので、翌日持ってくることを約束し、楽しみに待つことで明日に興味をもたせたりすると、子どもたちとの仲が深まっていき、歌遊びをきっかけにして今まで話しかけてくれなかった子どもが話してくれるようになった」と報告している。こうした点から実践力を考察すると、幼稚園教育要領 領域「表現」の「ねらい」や「内容の取り扱い」における「保育者の役割」に即して実習活動に取り組む学生の姿が認められ、生活や音楽的遊びを通して子どもの発達を援助する保育者の視点に立ち実践を積み上げ成長しているのが分かる。

学生たちたちの中には、この質問をした時点で実習園の事前オリエンテーション前だった学生

もいたことや実習園や時間の都合で予定していたものができなかった学生も多い。しかし、こうして、多くの学生は今後に取り組む保育への姿勢として、『実習では、子どもにうたわせているから、ただなんとなくうたっているような気がする。心から子どもたちがうたうことを楽しめるように、自分も「実習を上手く果たせたらよい」という考えを捨てて、いかに子どもたちが楽しめるかを考えながら自分自身が楽しみ、子どもたちが自然にうたいたくなるようにしたい』、また、「普段、あまり会話ができない子どもでも、リズム遊びや歌遊びなどに楽しく参加してくれるようにするにはどうしたらよいかを実習の中でよく観察したい」と気がかりな子どもへの援助など高度な力量をも身に付けようとしている。こうした姿から、質的向上を目指す保育の手がかりを見出し理論的に裏付けされた保育実践力が高められてきたことが考察された。

以上のから、本研究では、学生が実習を経験するたびに保育者としての能力を身につけている姿があったが、この時点でまた新たな課題を抱えている現状がある。また、子どもの発達理解の面など学生指導に不十分さやさらなる指導の強化すべき点を見出すことができた。今後も研究のための研究に終わることなく、学生指導に還元でき、学生の実践力を通して子どもの発達に還元できるよう、実習における学生や子どもの姿から保育実践力について研究し、授業の見直しと指導方法の充実を図り、学生の保育実践力の強化に努力したい。

## 注

- (1) 森上史朗他「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 1999年 p392
- (2) 文部省「幼稚園教育要領」大蔵省印刷局 平成10年 p10～11

## 参考文献

- (1) 岡田正章・千羽喜代子他「現代保育用語辞典」フレーベル館 1997年
- (2) 森上史朗「最新保育用語辞典」ミネルヴァ書房 1994年

## **Musical Expression and Professional Ability as a Nursery Teacher — Through the Practice of Students —**

Rikiyo NAGANE\*

近年、ますます保育者の役割が重要となり多面的な子どもへの発達支援を期待されていることから、今後さらなる保育実践力の強化が求められる。そこで、保育者を目指す学生が大学や保育現場で学習を重ねる中でどのように保育実践力を身につけているかを把握するため、保育実習・教育実習について「音楽表現への関心」を中心にアンケートを取って考察した。学生はそれぞれの実習を経験する中で、着実により高度な保育の手がかりを掴み、学習課題にも深く広く気づいていく様子や解決の糸口を捉えていることが分かった。従って、今後の学生指導においては、学生の捉えたその糸口から保育能力の向上を図る学習の方法や保育実践力の強化にむけて指導内容の充実に努めたい。

キーワード：音楽表現、保育実践力、関心、実習、気づき